

令和6年度 学校経営方針（案）

甲斐市立双葉中学校

1 校訓

「至 誠」

- ・何かのため善かれかしと純粹に思う心。このうえなく誠実なこと。まごころ。
- ・出典は「至誠にして動かざる者ものは、未だ之有らざるなり」（『孟子』離婁上）
- ・「誠の心を尽くしても心を動かさなかったという人はいまだいない」ことから「まごころをもって人に接すれば人は必ず心動かしてくれる」ことの意。
- ・この言葉は、人が人と関わる時の基本的な姿勢を説くものである故に、時代が変わっても不変であるとともに、価値観が多様化している現代であるからこそ、互いに認め合い、尊重し合い、良好な人間関係や全ての人が暮らしやすい社会を築いていくために不可欠な心構えである。

2 学校教育目標

主体的に学び、心身ともに健やかで、人間性豊かな生徒の育成

- 【自律】自ら考え、判断し、行動する生徒
- 【尊重】思いやりをもち、互いを尊重する生徒
- 【協働】伝え合い、聞き合い、共に創造する生徒
- 【克己】困難に挫けず、粘り強くやり抜く生徒
- 【健康】規則正しい生活（運動・食事・休養）を作れる生徒

[めざす学校像]

- 安全、安心で、一人一人の居場所がある学校
- 楽しい、行きたい、やりたい、がたくさんある学校
- 働きやすく、働きがいのある学校
- 地域といっしょに子どもを育てる学校

[めざす教師像]

- 子どもを真ん中において考える
- 子どもに寄り添い、伴走する
- 自己を磨き、謙虚に学び続ける
- 助け合いと恩返しができる
- 自分の人生を大切にする

3 今年度の教育及び経営重点

(1) 豊かな心の育成

- ① 教育活動全体を通して、校訓「至誠」を大切にし、思いやりの心やお互いを尊重する態度を育成する。

- ② 本校の宝である「至誠の鐘」、「日本一の玄関」、「ロッカーの整理整頓」、「朝読書」等の取り組みを継続、発展させ、学校への愛着や誇りを醸成する。
- ③ あいさつは人間関係（コミュニケーション）づくりの第一歩であり、社会人としての基本要素となる重要なものであるとの認識を生徒・教職員で共有し、登下校だけでなく学校生活全体を通してあいさつを習慣化するとともに、地域においてもあいさつができる態度を身に付ける。
（まずは、教師が生徒や来校者に積極的にあいさつをする）
- ④ 学級活動、道徳等において、ジェンダーや多様性について考える機会を計画的に設けることにより、性別、国籍、能力等による不必要な区別を学校生活からなくし、一人一人を一個の人間として尊重する態度を養う。
- ⑤ 委員会活動、学級活動等において、SDGSの取り組みを推進するとともに、生徒一人一人が自分の生活をSDGSの視点から見直し、現代の社会にあったよりよい生き方について考え、実践していこうとする態度を身に付ける。また、こうした取組を通して、今日的な世界的な課題への関心を育て、これからの社会を担っていく一員であるという自覚を醸成する。

(2) 誰一人取りこぼさない生徒指導・生徒支援

- ① 日頃から、声かけやコミュニケーションを大切にし、一人一人の生徒の状況の観察や把握を丁寧に行い、生徒が発する兆候を見逃さないようする。また、定期的なアンケート調査やQU調査等を生かし、生徒の実態把握を補完する。さらに、教職員間で日常的に情報交換を行うことで、不登校や学校不適応、いじめ等の未然防止、早期発見・早期対応を心がける。問題発生時は、的確な情報収集により、最善の方法を考え、組織的かつ迅速な対応を図る。
- ② 生徒はすべて発達の上であること、また一人一人が成長や発達の速度が異なることを常に念頭に置き、生徒に寄り添う態度で接することを大切にする。その際、性急に答えを求めたり結論を急いだりせず、生徒自身が自己決定できるように、支援者的、伴走者的立場を心がける。（自己決定を促す三つの言葉、「どうしたの」、「どうしたいの」、「先生には何ができる」を大切に）
- ③ 生徒一人一人が自己肯定感や所属感が感じられるような学級集団づくりを行う。そのために、一人一人に適切な役割と支援・評価を行い、一人一人が学校を自分の居場所として感じられるようにする。また、学校に来られなかったり所属学級に入れなかったりする生徒の居場所として、「ほっとスペースこすもす」の効果的な運用を進める。
- ④ 特別支援学級をはじめ通常学級にいる支援を必要とする生徒、生徒指導上の課題を抱える生徒の状況を校内支援部会、生徒指導部会で定期的に把握、情報共有し、適切な改善及び支援の方策を講じる。その過程においては、保護者との連携を図り、必要に応じてSCやSSWといった専門スタッフに適切に関わってもらおう。

(3) 望ましい人間関係の形成

- ① 良好な人間関係を作っていくためには、自分の気持ちをわかりやすく伝えるとともに相手の気持ちを言葉や態度から受け取って返していくコミュニケーション力が必要であることから、朝の会や帰りの会等の学級活動の時間を利用して、お互いの考えを伝え合い聞き合う場面を計画的に継続的に設ける。
- ② 学級活動や委員会活動、部活動等において、自分たちの活動を振り返り、課題を見つけ、その改善の方法を考え、実行する過程を大切にするここと、自分たちの生活を自分たちの手でよりよいものにしていこうとする態度（自治の力）を身に付ける。

- ③ 学級活動や生徒会活動、学校行事等を通して、生徒の居場所づくりや絆づくりに努め、自己肯定感を涵養するとともに、その取り組みを通してお互いの良さを見つけたり認め合えたりするようにする。
- ④ 職場体験学習等の啓発的体験活動の充実を図るとともに、学級活動を中心にして、「キャリア・パスポート」を活用して、生徒一人一人の社会的・職業的自立のために必要な基礎的・汎用的能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）の育成を図る。また、各教科、各行事においても、これらの能力の育成を念頭に置き、授業展開や取り組みの過程において、学校で学ぶことと社会のつながりを意識できるようにする。

(4) 学びの楽しさを育てる学習指導

- ① 各教科において、「授業七つの心構え（改訂）」を徹底し、授業に臨む基本的な姿勢を身に付けさせることで、「主体的・対話的で深い学び」の土台となる、落ち着いた学習環境を作る。
- ② 各教科において、年度始めや単元の始めに、生徒に身に付けさせたい資質や能力（評価の視点）を生徒に伝えることにより、生徒一人一人が目的意識をもち、主体的に学習に臨む態度を身に付けさせるとともに、透明性のある評価に資するようにする。
- ③ 各教科において、授業場面や評価問題の中に、自らの考えを記述する内容を計画的に取り入れることにより、自分の考えを整理し、まとめる力を身に付ける。
- ④ 各教科において、単元の過程に問題解決的な学習を計画的に位置づけ、生徒同士や生徒と教師による対話機会を積み重ねることで、一人一人が考えを広げ深められるようにする。
- ⑤ 各教科において、学習の振り返り場面を用意することで、自らの学習態度や学習の成果・課題に気づかせることにより、自らの学習を調整していく力を身に付ける。
- ⑥ 各教科において、ICTを効果的に利用することにより、学習意欲及び学習効率の向上を図る。
- ⑦ ①～⑥を実施することにより、それぞれの生徒が、確かな学力の定着（知識・技能、思考・判断・表現）、学びに向かう人間性の調和のとれた発達）ができるようにしていく。

(5) 健康・安全教育の充実

- ① 健康3原則（栄養、睡眠、運動）を推進し、望ましい生活習慣を確立させるとともに、日頃から自分自身の心身に關心をもち、健康な状態を保つために自分でできることを実践する態度を身に付ける。
- ② 体育的行事や部活動等を通して、体力の向上を図るとともに、最後までやり抜く粘り強くしなやかな心を育てる。
- ③ 避難訓練等を通じて、自助・共助の精神を涵養するとともに、日頃から安全について考え、災害時に適切に判断し行動できる実践的な能力や態度を育てる。
- ④ 学校施設・設備の点検を確実にを行うとともに、教職員・生徒とも整理整頓を励行し、安全な生活環境の保持に努める。また、絶えず危機管理マニュアル等の見直しを行い、安全で安心な学校づくりに取り組む。

(6) 地域・保護者とともにつくる学校

- ① 「社会でよりよく生きていくための資質や能力、態度を育てる」という目的を、学校と保護者が共有し、子どもを育てるパートナーとして、信頼・協力関係を構築し、学校、家庭がそれぞれの役割を果たす中で、一人一人の子どもが全人的な発達を遂げられるようにする。そのために、たより

やホームページ、連絡網等を活用し、学校の考えや生徒の様子を積極的に発信し保護者の学校への理解を深めるとともに、保護者の考えを聞く機会を計画的に設け学校教育に生かしていく。

- ② PDCAによる学校評価を生かした教育活動の組織的・継続的な学校改善に努めるとともに、本年度から設置となる学校運営協議会制度（コミュニティスクール）の効果的な運用について検討し、学校運営に保護者や地域の方が効果的に参画していくための枠組みづくりを進めていく。
- ③ 「地域の子どもは地域で育てる」という考えに立ち、地域の方に学校の教育活動を理解してもらうための方策を講じるとともに、地域の方に学校の支援（地域の方が学校に入る、子どもたちが地域に出て行く）をしてもらうための体制づくりを行う。
- ④ 今あるつながりを生かし、学校ボランティアとして、出前講座や奉仕的な作業に、保護者や地域の方に参加してもらうことを積極的に進めていく。同時に、地域の一員として、生徒が地域に貢献できる活動や地域の方と共同して取り組んで行く活動を考え、実施していく。

(7) 働きたいと思える学校づくり

- ① ウェルビーイングの考えに基づき、一人一人の職員が働きたい（働きやすく、働きがいもある）と思える学校づくりを職員全体で進めていく。
- ② 学校は子どもの学びの場であると同時に、「大人同士の学び合いの場」という認識に立ち、学校を職員一人一人にとって心理的な安全性が感じられる職場風土を醸成していく。そのためには、職員一人一人が職場風土を作る当事者としての意識をもち、普段からのコミュニケーションを大切にする。（特にリーダー的な立場やベテランの職員が率先して取り組む）
- ③ 管理職は適切な校務分掌配置を工夫するとともに、学校運営委員の協力を得て、業務等の集中や偏りにより過剰負担となっている職員がいないかを把握し、必要に応じて、年度途中であっても校務分掌の見直しについて検討する。
- ④ 時間外勤務を縮小し過重労働を避けるため、学校行事や生徒会活動等、諸活動の目的を明確化、焦点化するとともに、取組方法等の工夫改善を常に心がけ、取組時間の縮減と教育効果の両立が図れるようにする。
- ⑤ 計画的な年休取得を職場として進めるとともに、職員一人一人がそれぞれ異なる家庭環境や家族状況を抱えているとの前提に立ち、お互いに休みやすい職場風土を醸成する。
- ⑥ 一人一人の職員が働き方改革の当事者としての意識をもち、常に自分の働き方を振り返り、個人としてできる小さな業務改善に取り組む。